ブロッコリー産地の安定出荷への支援

■　東讃管内ブロッコリー生産者部会　■

（東讃農業改良普及センター　小川彰子　）

●対象の概要

東讃管内では、本県における主要な秋冬露地野菜であるブロッコリーの生産拡大を推進しており、ＪＡによる苗の供給や定植作業の支援により、近年、栽培面積が急速に拡大してきた。

現在、大川地区（さぬき市、東かがわ市）に生産者組織として４つの部会があり、栽培面積は約 80ha で､県内の栽培面積の約８％となっている。

●課題を取り上げた理由

大川地区は、県内では比較的小さな産地であり、市場からは期間を通じて計画的かつ安定的に出荷が確保されることが求められている。他県との産地間競争が激しくなる中で、これまで以上に有利販売を行い、生産者の所得を向上させるためには、産地全体としてどのように安定出荷体制を構築するかが最も重要な課題であり、解決に向けて下記の課題に取り組むこととした。

１　適期定植の励行

夏まき作型では、８月中旬からの稲刈り後、９月の定植まで短期間でほ場の準備を行う必要がある。しかし、近年の異常気象による長雨や豪雨等の影響により､ほ場の準備や定植が遅れ、適期に定植できないことが多く、市場ニーズが強い出荷開始時の数量をいかに確保するかが、有利販売する上でのポイントとなっている。

２　安定出荷できる作付体系の構築

冬季の気温の上昇によって、早生品種の収穫時期が前進化傾向にあり、後続品種との間に端境期が生じており、こうした気象変化に対応できる作付体系を再構築することが重要である。

３　大規模生産者の確保と育成

当地区では小規模な生産者が多いことから、作りやすい作型に集中する傾向があり、時期別の出荷量に偏りが生じている。こうした中、近年、所得の向上を目指して米麦主体の担い手や集落営農組織がブロッコリーの栽培に参入する事例がみられるようになった。産地の安定出荷体制を構築するためには、このような大規模生産者を確保・育成し、作付時期の平準化を図る必要がある。

●普及活動の経過

１　適期定植の励行

栽培講習会を開催し、適期定植の重要性や計画的なほ場準備の必要性について生産者への理解を推進するとともに、特にポイントとなる夏まき作型については、水稲を作付しない水田の計画的な活用と早期畝立に取り組むよう推進した。

また、新規栽培者に対しては正しい知識をもって生産に取り組んでもらえるよう、現地で地域の模範となるベテラン生産者の実演を交えながら、ほ場準備から収穫前まで時期別に研修会を開催し、早期の技術習得を図った。

新規栽培者を対象にした現地講習会

２　安定出荷できる作付体系の構築

５月に品種検討会を開催し、JA の担当者や部会役員と作付体系の見直しの必要性を共有化した。このため、過去の作付体系や出荷実績、気象条件等のデータを分析し、これまでの現地調査研究で得られた結果や農業試験場での品種試験情報も活用して､作付体系の検討を行った。

また、高性能機械で効率的にほ場準備を行い、幅広い作型に取り組んでいる担い手に協力してもらい、検討した作付体系に基づいて各作型の調査ほを設置し、生育や収穫状況を定期的に調査した。

３　大規模生産者の確保と育成

普及センター内の、集落営農・農産経営担当と連携して、米麦を主体とする担い手や集落営農組織毎にブロッコリーを導入した場合の営農類型を提示し、作付意欲を高めつつモデル経営体として育成を図った。

●普及活動の成果

１　適期定植の励行

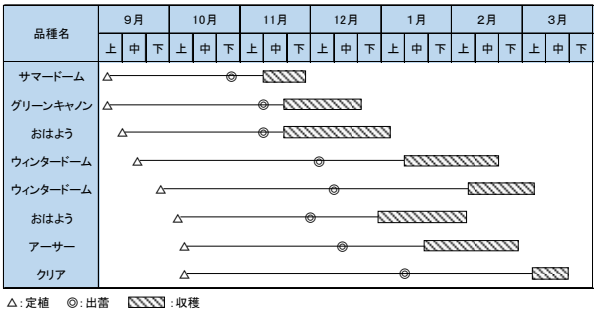
栽培講習会における生産者の理解の推進に加え、各作型の調査ほで、定植日と品種名を記した札を立てることによって、地域の生産者が高性能機械による効率的なほ場準備や定植機による定植作業、適期に定植された苗の生育状況に関心を持ち、適期定植の重要性や計画的なほ場準備への意識の高揚が図られた。

現地研修会の開催は、新規栽培者にとって、ベテラン生産者の作業を実際に見たり、アドバイスを受けることができ、技術習得への近道となった。

２　安定出荷できる作付体系の構築

調査ほを設置した結果、これまで作型適応性が広いとされていた早生品種‘おはよう’に、晩生品種‘ウィンタードーム’をこれまでより１週間程度早く定植する作型を組み合わせたところ、途切れることなく収穫できることが確認でき、端境期の解消ができた。

また、本年も異常気象による豪雨や長雨が続き、ほ場準備や定植作業が遅れる状況となったが、調査ほの設置にあたって、高性能機械で効率的にほ場準備を行い、適期に定植ができた担い手の協力が得られたことにより、各作型の生育や収穫等の状況を調査することができた。この調査結果を次年度の作付計画の作成に活用することとしている。



図－1　作付調査結果

３　大規模生産者の確保・育成

これまでの取り組みの結果、米麦主体の担い手４経営体と集落営農組織５組織がブロッコリーの栽培に参入し、高性能機械を保有していることから、幅広い作型への取組みや大規模栽培、適期の定植等に取り組まれており、産地の規模拡大と安定出荷に貢献している。また、露地野菜の導入は、米麦主体の担い手や集落営農組織の所得の増加による経営の安定化に寄与していることから、露地野菜の作付拡大のため、苗の移植機を補助事業の活用により導入する事例もできた。

今後、こうしたモデル的な取り組みを他の担い手や集落営農組織に波及させていくことによって、安定出荷に向けた産地の生産体制が強化されると考えられる。

調査ほでの収穫作業

●今後の普及活動の課題

ブロッコリーは、ＪＡによる苗の供給や定植の作業支援があるため、比較的栽培に取り組みやすい品目である。しかし、近年の異常気象による豪雨や長雨により、ほ場準備や定植作業が遅延したり、定植後も豪雨等により湿害を受けたりと生産が不安定になっている場面も多い。

しかし、これらについては、高性能機械による硬盤破砕の実施や高畝栽培等に取り組むことで克服できている事例がある。ＪＡもしくは高性能機械を保有する担い手や集落営農組織が主体となって、こうしたほ場準備作業を支援することができれば、適期の定植が可能となることから、産地の規模拡大と高品質安定出荷に大きく貢献でき、市場の要望にこたえられる産地へと発展するものと考えられる。